

英語教育と生徒のコミュニケーション能力

高校2年

◎目次

I はじめに

- 研究目的
- 各節の内容

II 日本におけるコミュニケーション教育の現状

- (1) コミュニケーション能力の定義
- (2) 教育目的におけるコミュニケーション能力の向上
- (3) なぜコミュニケーション能力を重視するのか

III 他国のコミュニケーション

IV 多言語習得者への聞き取りとその考察

- (1) 聞き取りの内容
- (2) 聞き取りを踏まえた考察

V 中学・高校生へのアンケートとその考察

- (1) アンケートの内容
- (2) 結果を踏まえての考察

VI フィンランドの英語教育

VII まとめ

I はじめに

・研究目的

急速にグローバル化する社会において、「日本人はコミュニケーション能力が低い」と指摘されるようになった。日本の英語教育では、この日本人のコミュニケーション能力の不足を重要視し、教育目的の一つとしてコミュニケーション能力の向上をあげている。英語を使えるようになるだけでなく、グローバル社会でも通用するコミュニケーション能力も同時に養う方法は、今後ますます検証していくべき課題であると考え。本論文では、英語教育がどのように生徒のコミュニケーション能力向上につながるのかについて考察していく。

外国人との交流を大切にした英語教育は、生徒のコミュニケーション能力を向上させるのに効果的だという仮説をもとに、文献調査や、インタビュー、高校生へのアンケートにより検証を進める。

・各節の内容

Ⅱ「日本におけるコミュニケーション教育の現状」で日本の教育現場でコミュニケーション能力がどのように扱われているのかや、その理由について説明したうえで、Ⅲ「他国のコミュニケーション」では他国と日本のコミュニケーションについて比較する。また、Ⅳ「多言語習得者への聞き取りとその考察」、Ⅴ「中学・高校生へのアンケートとその考察」で実際に自分の仮説に対する調査の結果を紹介し、Ⅵ「フィンランドの英語教育」でフィンランドと日本の英語教育を比較する。

Ⅱ 日本におけるコミュニケーション教育の現状

(1) コミュニケーション能力の定義

英語教育と生徒のコミュニケーション能力の向上の関係について考察していくが、ここでいうコミュニケーション能力とは、英語を一つの言語として習得しどれだけ自由に操れるかという意味ではなく、英語を使用したときの相手との関わりにおいて不可欠である意思疎通能力のことである。デジタル大辞泉によると「コミュニケーション能力」の定義は「社会生活において、他者と円滑に意思の疎通が行える能力」とされている。

(2) 英語教育によるコミュニケーション能力の向上

近年、日本の教育現場では従来の教育のやり方を大きく変えるような新たな取り組みがたくさん行われるようになった。今までは与えられた問題をどれだけ解くことができるかという学力が重視されていたように見える日本の教育も、海外の教育方法を取り入れるなどして、生徒同士のコミュニケーションやそれをどう問題解決に応用するかといった能力を求めるものへ変わってきている。実際に文部科学省の「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説」には、「外国語による「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」及び「書くこと」の言語活動を通して情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図るために必要な「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力を更に育成すること」が学校における外国語教育の目標であるとしている。

(3) なぜコミュニケーション能力を重視するのか

近年、生徒のコミュニケーション能力向上に向けて活発に議論が交わされるようになったが、これには主にグローバル化した社会が関係している。二宮真智子はこのグローバル化による影響について次のように述べている。

国際コミュニケーションのスタンダードは、あいまいさを嫌い、個人を前面に押し出す欧米型である。察しを期待した暗黙のコミュニケーションは通用しにくくなった。従来の日本型コミュニケーション・スタイルを変えなければ、国際社会で大きな誤解を受け、信頼を失い、きわめて不利な立場に立たされかねない。(2004)

このことから、特に国際コミュニケーションの形式との違いが顕著に見られる日本人の意思疎通の仕方を場面に応じて改善していくことが重要であるということが分かる。

Ⅲ 他国のコミュニケーション

日本人がコミュニケーション能力が低いと言われる原因の一つに、互いに意思疎通をする際の文化が他の国と比べて特殊であるということが挙げられる。Ⅱ-(3)にも書いたように、日本はよく、その会話や他者との交流の仕方を、「察する」「空気を読む」文化という言葉で表現されることが多い。このような会話の仕方になったのは、歴史的な背景が大きく関係している。海外では国同士が陸続きであったり、移民などが他の土地に移り住むといったことが多いため、他人種多民族との交流が多く、人々の間で共有されるコンテクストが少ない。一方、島国であり長い間鎖国政策を取っていた歴史のある日本は、同一民族で共有されるコンテクストが多く、はっきりとした言い方をせずに意思疎通ができてしまう。この日本のように共有されるコンテクストが多い文化をハイコンテクスト、逆に共有されるコンテクストが少ない文化をローコンテクストの文化という。世界の主要な民族をローコンテクストに近い順に、「ドイツ系スイス人、ドイツ人、スカンジナビア人、アメリカ人、フランス人、イギリス人、イタリア人、スペイン人、ギリシャ人、アラブ人、中国人、日本人」と位置づけ、この中では日本人が最もハイコンテクストの文化であるとする研究もある(藤本久司 2011)。これが、日本人はしっかりと会話ができないと思われる理由の一つである。

Ⅳ 多言語習得者への聞き取りとその考察

(1) 聞き取りの内容

聞き取りを行うために、JAAC日米学術センターが行うSLICE Online Programというワークショップ(2022年8月)に参加した。そこで、言語習得の過程とコミュニケーション能力の関係性について考えを深めるために、「実際に多言語を話す人は外国語を使用したコミュニケーションにおいて何が大切だと考えているのか」という内容で聞き取りを行った。聞き取りを行ったのは、ワークショップに教師として参加してくださった外国籍の20代の男女である。

聞き取りを行った結果、コミュニケーションにおいて大事な点が2つ挙げられた。

まず1つ目は、ジェスチャーや声の抑揚、表情といった言語能力以外の部分を意識しながら意見を伝えようとすることである。これにより、拙い話し方でも話したい内容がつかみやすくなるだけでなく、相手も自分も楽しみながら会話することができるという。

そして2つ目は、自分の意見が正しいかどうかを気にするのではなく、相手と共有しようとする姿勢をより大事にするべきだということである。彼らには、話してみないとそもそも意見を修正したり考えを深めることができない、相手が自分から何かを学ぶ可能性もあるのにその機会を相手から奪っている、という考え方があるのだという。

(2) 聞き取りを踏まえた考察

(1)をまとめると、今回聞き取りを行った外国籍の20代の男女は、外国語を使用したコミュニケーションにおいて大事なのは会話を楽しみ意見を共有していこうとする姿勢だと考えていること

が分かる。また、彼女たちの聞き取りに対する答えが、意見共有という点に集中していることから、外国語学習を、ただ外国語を話すためのものではなく常にその言語を実際に使用することを前提としたものと捉えていると取れる。

V 中学・高校生へのアンケートとその考察

(1) アンケートの内容

Ⅲで述べたように、国や地域によってコミュニケーションの取り方に違いがあることが分かっているが、実際に違う文化の人同士で交流することでその人のコミュニケーションに対する考え方にどのような変化が生まれてくるのかを調べるために、アンケートを行った。

アンケートの内容

家族に外国人がいる26人と、いない121人に対してアンケートを行い、以下の質問に答えてもらった。

1. 母語が同じ人同士(友達など)で話をするとき、いちばん重要だと思うのは次のうちどれですか？
2. 外国語を学ぶときに一番重要だと思うのは次のうちどれですか？
3. 外国人と会話をするとき、一番重要だと思うのはどれですか？

(2) アンケート結果とその考察

このアンケートの結果では、家族に外国人がいる人をAグループ、いない人をBグループとする。

1. 母語が同じ人同士(友達など)で話をするとき、いちばん重要だと思うのは次のうちどれですか？(図1)

Aグループ(家族に外国人がいる人)

:語彙力42.3%、聞く力34.6%、発音・論理的に説明する力11.5%

Bグループ(家族に外国人がいない人)

:語彙力40.2% 聞く力37.7% 論理的に説明する力13.9% 文法6.9% 発音1.6%

問1
母語が同じ人同士（友達など）で話をするとき、いちばん重要だと思うのは次のうちどれですか？

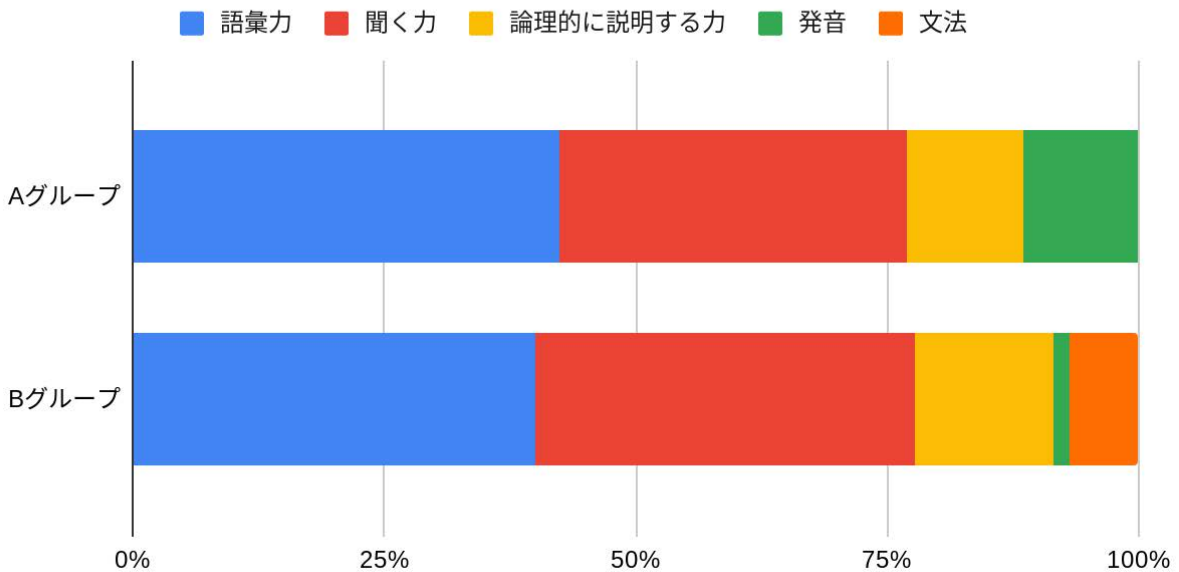


図1

どちらのグループも語彙力や聞く力を大事にしており、あまり差はなかった。しかし、Aグループ（家族に外国人がいる人）で文法と回答した人がいなかったのに対し、Bグループ（家族に外国人がいない人）では文法と回答した人が、発音と回答した人を上回って6.9%であった。

2. 外国語を学ぶときに一番重要だと思うのは次のうちどれですか？（図2）

Aグループ（家族に外国人がいる人）

: 語彙力38.4% 聞く力34.6% 発音19.2% 文法・論理的に説明する力3.8%ずつ

Bグループ（家族に外国人がいない人）

: 語彙力39.4% 聞く力24.6% 発音23.8% 論理的に説明する力9.8% 文法2.5%

問2 外国語を学ぶときに一番重要だと思うのは次のうちどれですか？

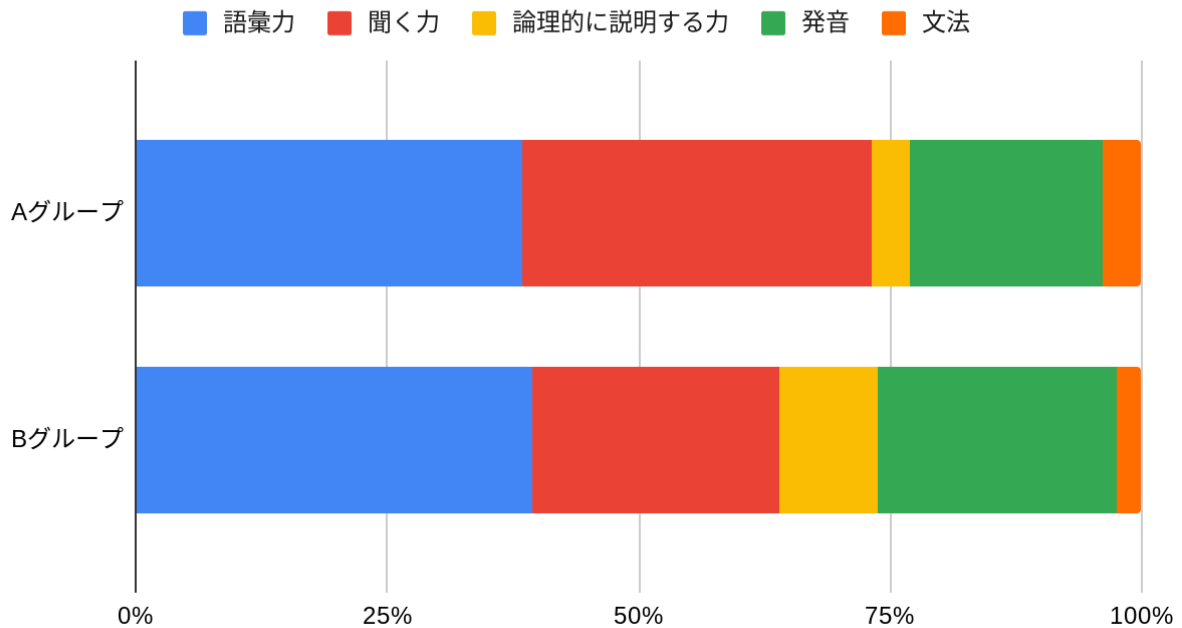


図2

問1と同様にどちらのグループも語彙力や聞く力を大事にしており、その2つの項目に関しては差はあまりなかった。1と比べてどちらのグループも発音を重要視する人が増え、文法・論理的に説明する力を大きく上回って三番目に多くの回答を得ている。

3. 外国人と会話をするとき、一番重要だと思うのはどれか。(図3)

Aグループ(家族に外国人がいる人)

:語彙力38.5% 聞く力34.6% 文法11.5% 発音・論理的に説明する力7.7%ずつ

Bグループ(家族に外国人がいない人)

:語彙力44.2% 文法25.4% 聞く13.9% 発音11.5% 論理的に説明する力4.9%

問3 外国人と会話をするとき、一番重要だと思うのはどれか。

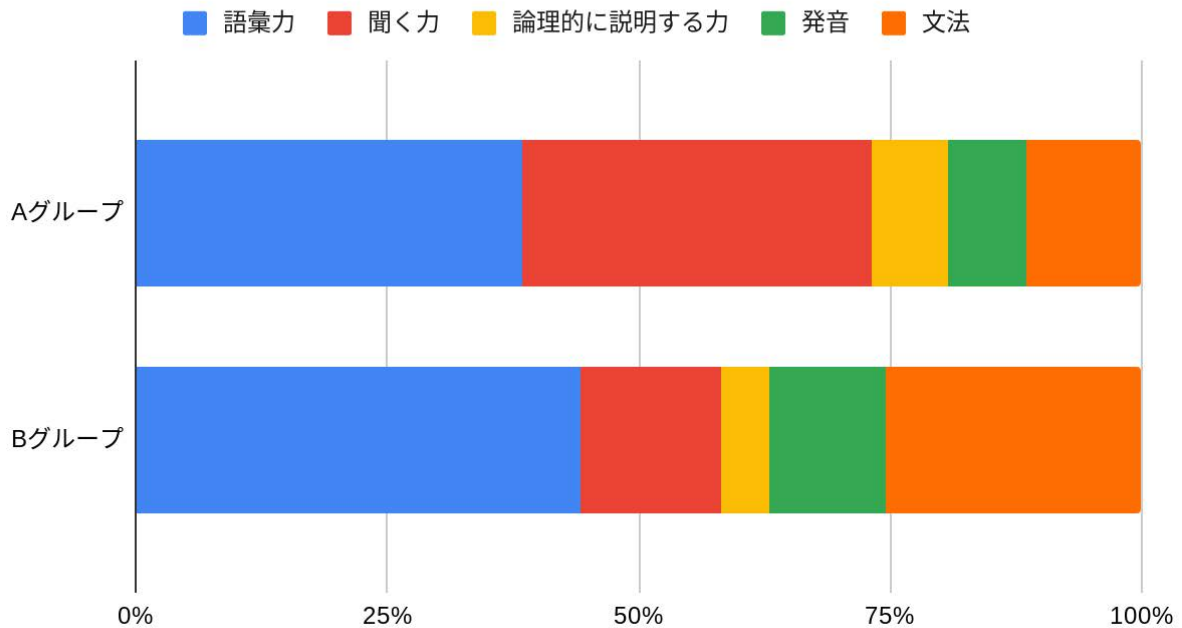


図3

Aグループ(家族に外国人がいる人)は1・2同様に語彙力や聞く力を大事にしているが、Bグループ(家族に外国人がいない人)は聞く力よりも文法と回答した人が多い。

- アンケート結果を踏まえた分析

Aグループでは、質問2・3に関してそれほど差はないが、Bグループの人は、外国語を学ぶときは文法よりも語彙力や聞く力、発音を重要視する人が多い反面、外国語を話すとなると文法力も同程度重視する人が多い(図4)。このことから、Bグループの人は外国語を「使う」と「学ぶ」ことを分けて考えてしまっているのではないかと考えた。その点、Aグループは「使う」ために「学ぶ」という意識を持っていると言えるのではないか。

Bグループ（問2・問3の比較）

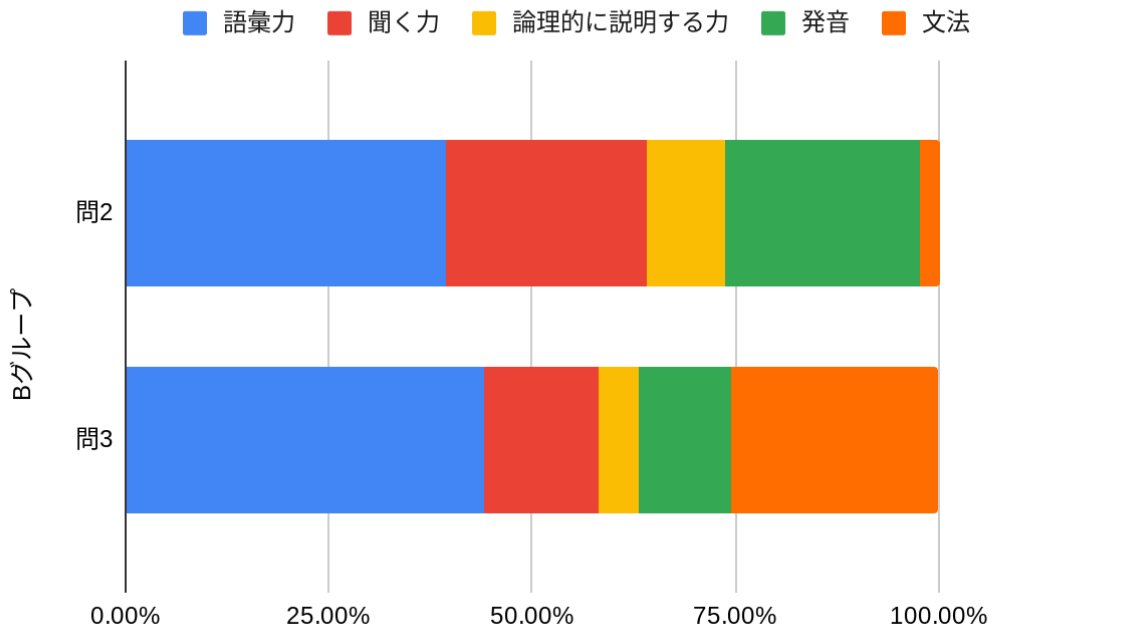


図4

VI フィンランドの英語教育

フィンランドは、EF英語能力指数と呼ばれる英語を第二外国語とする国のレベル調査によると、世界第8位(2022)であり、国際的に見ても英語能力が高い国といえる。また、日本は第80位と、フィンランドとの差が大きい。

調べた中で明らかに日本とフィンランドで違いがあったのは、生徒が学校で習う単語数や文章量である。小学校から高等学校にかけて、フィンランドでは約7360語・10018文の量が教科書に載っているが、日本では約3280語・5460文しか教科書に載っていない。また、教科書数もフィンランドが22冊なのに対して日本は11冊と、フィンランドのほうが学習量が圧倒的に多いことが分かる。私が中学生・高校生に向けて取ったアンケートの結果で、コミュニケーションに語彙力を重視する人の割合が多かったが、フィンランドではその語彙力が学校での学習で培われている。日本の大学を受験するのに必要な英単語数がおよそ4,000~6,000語とされているため、フィンランドの学生がどれだけ多くの英単語に触れているかが分かる。さらにその語彙は、各ユニットごとに学習した文法やテーマで使われやすい語が結び付けられている。そのため、日本の学習方法と比べ、学習した語彙をただ暗記するだけでなく実際にその語彙を正しく使用することに重点が置かれているといえるのではないか。

VII まとめ

今回の研究では、最初に立てた「外国人との交流を大切にしたい英語教育は、生徒のコミュニケーション能力を向上させるのに効果的だ」という仮説に対して、明確な結果を得ることはできなかった。しかし、アメリカやヨーロッパ諸国の人々と日本人のコミュニケーションに対する考え方の間には違いがあり、アメリカやヨーロッパ諸国の人々は外国語学習に対しても似た考え方を持っていること、そして今回アンケート調査に協力してもらった普段から外国の人と多く接している学生は、そうでない生徒と比べ、外国語学習に対して「使う」とこととの関連性を意識しているということ

が分かった。このことから、日本の学生の外国語学習に対する考え方においては「外国人との交流」が影響を与えることができると考える。

また、仮説とは違う点で分かったこととしては、日本の英語教育には海外のものと比較して語彙力の育成が足りておらず、今回取ったアンケート結果をみても、生徒が語彙力をとても重視していることは、生徒の語彙力に対する不安の表れとも取れるのではないか。そのため、日本の英語教育では語彙力に力を入れるべきだと考えた。

今後の課題としては、ではその外国語学習を「使う」ことを前提とした学びだと捉えることが実際にコミュニケーション能力の向上につながるのかを調査する必要がある。その関連性がわかれば、外国人との交流が生徒の外国語学習に対する考え方に影響を与え、さらにそれがコミュニケーション能力を向上させるという、間接的に仮説を証明することができる。

<参考文献>

◎本

- 伊東治己『フィンランドの小学校英語教育』研究所, 2014年

◎論文

- 藤本久司『文化の類型とコミュニケーションギャップ』人文論叢(三重大学)/ 第28号, 2011年
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsser/33/4/33_No_4_180412/_pdf
- 古家聡 櫻井千佳子『英語に関する大学生の意識調査と英語コミュニケーション能力育成についての一考察』The Basis : 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 / 第4号, 2014年
<https://core.ac.uk/download/pdf/72749962.pdf>
- 二宮真知子『思考・感情を表現する力を育てるコミュニケーション教育の提案:メタ認知の観点から』鳴門教育大学学校教育実践センター紀要 / 第19号, 2004年
- 米崎里 川見和子『フィンランドの小学校英語教科書における語彙活動の分析』
https://www.jstage.jst.go.jp/article/celes/48/0/48_229/_pdf-char/ja

◎インターネット

- EF EPI 2022 英語能力指数
<https://www.efjapan.co.jp/epi/>
- 高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編
<https://ssk.econfn.com/kougi/koukosidou.pdf>